黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.74 (September 30, 2012)

第74号　2012年9月30日

例会発表要旨

12月例会　2011年12月10日　私学会館アルカディア市ヶ谷

「アフリカ系アメリカ人と言語意識　―　アフロセントリシティーからみた一考察（その目的や問題提起）」

源　邦彦

1973年、ミズーリ州セントルイス市で開催された黒人児童に関するある心理学会で、その終了後黒人学者数名が非公式に小さな会議を開いた。そこでは、カリフォルニア州オークランド市教育委員会が1996年に可決した決議を境に全国的に知られるようになるある言語論が提示された。

その言語論とは、米国アフリカ系奴隷子孫のことば（African American Language:AAL）が英語の「方言」ではなく西アフリカ地域に由来するアフリカ系の新「言語」すなわち「エボニクス（Ebonics）」であるとする言語系統論である。これは、社会言語学者のあいだでは「アフリカ論（Africologist/Africanist Theory）」として知られている。

その定義を最初に提起した人物は、当時は言語学を専攻する大学院生であり、現在はロサンゼルスにあるチャールズ・ドリュー医科理科大学で臨床言語学の教授職を務めるアーニー・A・スミス（Ernie A. Smith）である。本発表では、スミスがAALを英語とは異なる言語であると論証する「科学的」根拠をなぜ「比較言語学」に求めたのかを、フィッシュマン（Fishman 1972）の提示した言語ナショナリズム論（言語的継続性、言語的固有性を再構築あるいは想像することによって達成される民族的統一と民族的真正）から考察した。

２月例会　２０１２年２月２５日　神戸市外国語大学

①　国際カリブ文学会で行ったキューバ

井上　怜美

2011年11月2日から5日、第12回国際カリブ文学会がキューバのハバナで開催された。カリブ文学会の大多数のメンバーがアメリカ人で、通常アメリカとキューバは国交がないためキューバには行けないが、学会だからという理由でアメリカ政府からキューバ渡航許可をもらい、マイアミからチャーター機でキューバに飛んだ。帰国後、「現在のキューバの状況を知りたい」という黒人研会員の声に応え、キューバの社会、歴史、宗教、ハバナを愛したヘミングウェイの住居、その他につき発表者が撮ってきた写真を回覧してもらいながら紹介した。キューバで一番印象に残ったのは「アメリカの経済制裁にもかかわらず、私たちは立派に社会主義の国をやっている」という人々の自負であった。現在キューバは社会主義の国であるが、社会主義国となったのには歴史的経緯がある。1942年コロンブスがキューバに到着して以来スペインが、後にアメリカが宗主国になり、経済的収益は宗主国に集められ、一般市民は貧困にあえいだ。その経済構造を変えようと、チェ・ゲバラやフィデル・カストロらに率いられた人々が1959年革命を成功させた。アメリカの経済制裁で、物資が入ってこなくなり、食料、日用品などは現在も配給制である。ソ連とは1960年から外交関係を結んだものの、1991年ソ連崩壊後の10年はキューバの人々は極端に貧しい生活を強いられた。しかし、全ての人が同じ配給を受けてしのいだ。「あの十年をみんなで頑張った」というキューバ人の誇りはキューバ国民の連帯感を強めたように感じた。

②　Alice WalkerのPossessing the Secret of Joyから20周年
――欧州におけるFGM廃絶運動から見た作品の意義とその重要性――

光森幸子

アリス・ウォーカーの1992年出版の *Possessing the Secret of Joy* は、英語圏においてFGMの問題に初めて挑んだ小説である。ウォーカーは、FGMによる精神的・肉体的なトラウマを、主人公タシ (Tashi) を通し、婉曲無く表現した。更に、翌年1993年には映画 *Warrior Marks* を発表し、普遍的人権擁護の立場から反FGMを強く表明した。しかし、小説も映画もアメリカでは激しい批判に晒され、以来、ウォーカーはFGM問題への言及を最近まで避け続けてきた。本論では小説出版から20周年目に際し、ウォーカーの作品がこの期間にFGM廃絶運動に果たしてきたパイオニア的意義と、その重要性を検証した。

まず前半では、前述のウォーカーの沈黙の理由を考察すると共に、現在、欧州でFGM廃絶運動に積極的に取り組むアクティビストの人々の意見、活動、論文を参照しながら、映画 *Warrior Marks* と小説 *Possessing* に対する、アメリカと欧州の評価の違いを明らかにした。

ウォーカーは、自身への批判が、性器切除の問題から人々の目を逸らす為に文化相対主義の主張に利用される一方で、犠牲者が増加し続けている状態を知り、自ら身を引いた。事実、アメリカではアカデミズムとアクティビズムに乖離が生じ、活発な廃絶運動が行われているとは言い難い。一方、欧州では、移民の多いイギリス、フランス、ドイツでウォーカーの小説・映画は広く受容され、特にドイツでは、殆どの高校や大学で *Warrior Marks* が教育目的で上映されている。アクティビスト達は、ウォーカーのメッセージを弾みに、アカデミズムや政府と連携し、FGMを逃れてきた女性達へのアサイラムの提供を制度化（2001年）させる等、確実に運動を前進させてきた。

また、本論の後半では小説と映画への批判点を整理し、小説 *Possessing* の描写を分析しながら、これらの批判に反論を試みた。作品への主な批判点は、① 文化的多様性の軽視によるカルチュラルインペリアリズム、西洋視点のステレオタイプを助長、② FGMを児童・女性虐待と断罪しアフリカの女性達を告発、文化相対主義を非難、③施術者M'Lissaを殺すことによるアフリカの伝統的価値批判、④同性愛、女性のセクシュアリティの描写による西洋フェミニズムの押し付け、の4つである。

ウォーカーは小説の中に、ヨーロッパ人の心理・精神分析学者 Carl Jung (カール・ユング) と同姓同名の人物を設定している。 彼は、「タシにされたことを自分にされたこととして理解する」ことで、「ユニヴァーサル・セルフ」としての自身のアイデンティティを認識する。この「ユニヴァーサル・セルフ」 に到達することは、タシも含む登場人物たちの究極の目的であり、小説の核を成す要素である。暴力的慣習とその思考様式を強いるシステムは厳しく非難されているが、アフリカの伝統的社会の、つまり母と娘の尊敬と愛情に基づく関係は決して軽視されてはいない。タシが施術者を殺害した理由は、自身の中にいる、無力な犠牲者、暴力的伝統の共謀者、感情を喪失した施術者であるツンガ (tsunga) との決別で

あった。ウォーカーのメッセージは、これまで否定され続けてきた、女性達の「痛み」の表現を支援する国際的な連帯の必要性であり、アクティビストの見地から読み直すことで、その意義は新たに捉え直されると論じた。

４月例会　２０１２年４月２８日　立命館大学

①　白人クレオールの「帰郷ノート」
――ジーン・リースの1936年の帰郷に関する一考察――

杉浦　清文

本発表では、ドミニカ島の首都ロゾーで生まれた白人クレオールの女性作家ジーン・リース（1890-1979）の複雑な故郷感を検証した。1907年、リースは17歳になる数か月前に英国へ渡った。以後、リースはヨーロッパを点々とし、英国で生涯を終えたが、彼女は1936年に人生でただ一度だけ、その当時の夫レズリー・ティルデン・スミスと共にドミニカに帰郷している。

しかしながら、この帰郷を通じて、リースは自分自身が故郷喪失者であるという現実を目の当たりにしたのである。リースは、1936年3月の初めにマルティニーク、セントルシアを訪れ、3月の終わりにはドミニカに滞在している。ここで興味深いのは、黒人文学運動（ネグリチュード）の先駆者の一人であるエメ・セゼールもまた、1936年に、渡仏してから初めての帰郷（マルティニーク）を実現している点である。セゼールは、その年の夏に『帰郷ノート』を書き始めたともいわれている。

1930年代は、西インド諸島の歴史に即せば、「黒人性」が再確認された時期であった。今回の発表では、こうした歴史的背景を視野に入れながら、リースの手記や自叙伝を丹念に読み解き、1936年に帰郷した際の彼女の胸中を推察した。

②　『聖なるゲーム』と宗教的コミュナリズム

加藤　恒彦

ブラーミンの家系に生まれながらも無能な父と、美しいが不実な母についての屈辱の思い出を記憶の奥底に押し隠し、故郷を無一文で去り、ヤクザの世界に生きるすべを見出したガイトンデは、裏切りによって得た資金を元手にムンバイでの成功を目指すのだ。幼年

時代の屈辱感を強烈な上昇志向や野心に変え、人を率い、従わせる大胆さ，賢さ、強さを兼ね備えたガイトンデは、ムンバイのヤクザの世界でたちまち頭角を表し、ヤクザ間のシマ争いに突き進んで行き、ムンバイの闇社会の一角を占める組織を作り上げる。その過程で、ガイトンデは、警察や政治家との間に相互に利用しあう依存関係を形成して行く。そしてアヨーディア事件の後、ムンバイを吹き荒れるヒンドゥー教徒によるムスリムに対する宗派暴動のなかで、それまで宗派的感情に左右されなかったガイトンデも、ヒンドゥーのヤクザの親分としてのアイデンティティを引き受けざるを得なくなり、ヤクザとしてのシマ争いもまたヒンドゥーの親分対ムスリムの親分の戦いという様相を帯びてくる。

こうしたなかで次にガイトンデは、ヒンドゥー・ナショナリストの政治家の依頼で、ムスリムの攻撃に備えようとするヒンドゥー・ナショナリストのために武器を密輸するという仕事を引き受け、その依頼元であるヒンデゥー教のグールーと出会い、やがてガイトンデはそのグールーに引きつけられてゆく。ガイトンデは知らずして、幼い頃に求めて得られなかった父親像をグールーに投影していたのであろう。しかし、ガイトンデは自分がそのような弱みを掴まれ、グールーのヒンドゥー・ナショナリストとしての恐るべき謀略に利用されていたことを知る。

グールーの謀略の背景にあったのは、ヒンドゥー教の終末論である。グールーは、現代をカリ・ユガ（Kali Yuga）と捉える。すなわち、この世の4つのステージのなかの最後のステージとしての最悪の時代と捉え、この時代には大戦争が起こり、世界の悪を滅ぼし、その後に黄金時代が訪れる、というのである。そして、そもそもこの世とは絶えざる創造的破壊の繰り返しであり、大戦争はその為の破壊であると位置づける。その背後にあるのは、この世の醜さへの嫌悪であり、そのラディカルな否定の感情と救いへの主観的願望だろう。この世は意識であり、意識がこの世を変えるのだ、というヒンデゥー教のアートマンの教義が、その主観的願望を支えている。そしてそれが多くの人命を犠牲にするという反対論に対しては、我々がリアルだと思っている多くの人が生活しているこの世界は実は幻想である（この世はヴィシュヌ神のまどろみである）とグールーは語る。

このような思想の現代ヒンドゥー・ナショナリズムのなかでの位置づけや、その原典としてのヴェーダや『マハラバーラタ』、『ラーマーヤナ』との関係については今後の課題としたい。いずれにせよ、ガンジーの思想もまたヒンドゥー教の伝統を源泉としており、ヒンドゥー教の伝統のなかから何を本当に現代に継承するのか、という課題はキリスト教の場合と同様に、信仰心の篤いインドにおいて焦眉の現代的課題であろう。

他方、ガイトンデに接近していたインドの諜報部は、グールーが姿を消してしまう頃からガイトンデを見失ってしまうが、ガイトンデのカクシェルターでの謎の死後、ガイトンデが関わっていたスキームの実態に次第に迫ってゆく。そして、ヒンドゥー・ナショナリストの一派がインドのイスラム過激派を装ったテロリスト集団をでっち上げ、資金をパキスタンの諜報

部から集め（それはパキスタンが発行していた偽インド紙幣だったのだ）、ガイトンデを利用し核爆弾を作るのに必要な物資を運ばせ、ムンバイで核爆発を起こし、インドとパキスタンとの間の核戦争を勃発させようとしていることを知り、サルタージを通じて事件の解決を図る。

そのようなガイトンデとグールーを巡る直接の事件にとどまらず、『聖なる』に特別の深みを与えているのは、インドとパキスタン双方の諜報部員の過去と現在を描いた「挿入節」である。とりわけインドの諜報部員K.D. Yadavの生涯は興味深い。中印戦争後、インドの国家建設を揺るがした様々な問題や紛争に諜報部員とし使命感を持ってかかわり、歴史の表面に決して現れない形で結果を残してきたヤダフは、病院での死を前に、一抹の空しさを抱いて死んでゆくのである。

他方、物語の最後に置かれているガイトンデの自殺の真相も妙味深い。グールーに裏切られたガイトンデがこの世の終末を思い描いた時に唯一、一緒にいることを望んだのがジョジョであった。しかし、ガイトンデは、結局ジョジョにも、そして自分が世に出した女優との「愛人関係」も、実は利用されていただけであった、という事実をジョジョに突き付けられ、その冷厳な事実と自分が突き落とされた孤独に耐えられず、彼女を殺し、自分も自殺するのである。ガイトンデは、両親から与えられなかった愛情と誇りの結果としての孤独とコンプレックスをバネに手段を選ばず裏社会を生き抜いてきたのだが、その結果、本当の意味で信頼され愛される生き方から遠ざかっていたのである。

５月例会　２０１２年５月１９日　青山学院大学

文化の生産――Jessie FausetのThere is Confusionにおける都市文化について――

猪熊　慶祐

ジェッシー・フォーセットの作品に対する評価は、発表当時から賛否両論であった。W. E. B. デュボイスらからの肯定的な評価がある一方で、クロード・マッケイらからは、彼女の作品は中産階級の域を出ていないと評し、否定的な見解を示した。

その後の批評においても否定的な評価が下され続けることとなったが、デボラ・マクドウェルらフェミニスト批評家によって、中産階級的作風の中に、女性登場人物が自立を求め

た際に直面する社会的問題とその葛藤を描いていると解釈され、再評価をされるようになってきた。

本発表では、フォーセットの長編第一作目である、There Is Confusion (1924)において、これまであまり論じられることのなかった、主人公が選択するダンサーという職業と結婚という結末の関係を考察した。本作は、黒人中産階級に属するジョアンナとピーターの恋愛と結婚に至るまでの物語が作品の軸として展開され、サブプロットにおいては、マギーという名の女性の不実の結婚とその破綻、そして自立までが描かれる作品である。本発表においては主人公のジョアンナに注目した。作者は、ジョアンナを自立と有名になることに強い願望を持つ人物として描き、舞台に立つことを職業に選択させる。ジョアンナが直面するのは、舞台上から自らの演技で観客を魅了することと、舞台を離れた彼女に投げかけられる視線の問題である。フォーセットは、黒人女性が舞台に立つことを生業とする時に、単に消費されるだけの商品としてなり下がってしまう危険性を問題視していたと考察し、商品として彼女を見る視線を避けるために、上品な伝統である結婚の結末へと導いたと論じた。

7月例会　2012年7月21日　キャンパスプラザ京都

Bharati MukherjeeのJasmine (1989)を読む
——非合法インド人移民女性が見たアメリカ——

加藤　恒彦

インド系アメリカ人作家Mukherjeeは、アメリカへの非合法移民の問題を大きなテーマとして描いてきた作家であり、1988年には、アメリカに帰化した作家として初めて全米批評家賞（National Book Critics Circle Award）をMiddle Man and Other Storiesで受賞した。Jasmineはその一年後に発表され話題を呼んだ作品である。

ディアスポラのインド人作家にはインドを主な素材にする作家が多い中で、Mukherjeeは帰化したアメリカでの移民体験を正面から描いている。Jasmineも、強い自我と大きな人生への夢を抱く女性ジャスミンが、その夢を実現する唯一の道としてパスポートを偽造し、アメリカに新たな人生の活路を求めるまでのインドでの生活を描きつつ、ジャスミンのニューヨークやオハイオ州の農村での体験を主に描いた作品である。Mukherjee自身は60年代の初期からアメリカに渡り、公民権運動の時代のアメリカを体験しているが、物語の時

代設定は、人種関係が好転しつある80年代の初めから90年代のアメリカになっており、全体としての明る肯定的なトーンをこの小説に与えていると思われる。というのは、ジャスミンのアメリカ体験は、到着直後の密航船の船長による被レイプ体験とその男の殺害という血なまぐさい悲惨な事件によって始まるのだが、その後途方に暮れるジャスミンは非合法移民を援助するアメリカ人女性リリアンに助けられニューヨークのインド人社会にたどり着くことができた。また、閉鎖的なインド人社会に飽き足らずアメリカ社会に飛び出して行きたいとジャスミンが願ったときに助けてくれたのもリリアンのニューヨークに住む娘であった。リリアンが紹介してくれたのは、夫がコロンビア大学の教授、妻が出版社の編集者をしていたテイラー夫婦であった。ジャスミンはテイラー夫婦が養子として受け入れていたダフという小さな子供の世話を住み込みですることになったのだ。そのことを通じ、ジャスミンは、知的でリベラルなアメリカ人の良さに触れるのである。テイラー夫婦はやがて妻の別の男性との恋愛によって離婚の危機を迎えるのであるが、ジャスミンは残されたテイラーと養女のダフを支え、しだいにテイラーを愛してゆく。だが、ある日、ジャスミンが非合法でアメリカに入国していることを知っているインド人と偶然出会い、彼女はニューヨークを離れ、なんのつてもないながらにオハイオに向かう。そして、身よりのない自分を受け入れ、愛しててくれた地域の銀行の支配人バッドと生活を共にすることになり、白人中心の中西部の農村地域社会の現実を知ることになる。農村のアメリカ人の「外国」への無知、バッド元妻とジャスミンの微妙な関係、変動する地域社会のなかで悩む地域の農民たちの問題、バッドとともに養子として受け入れたベトナム難民の子供が結局アメリカのベトナム社会に帰って行く問題等を通じて移民として白人中心の社会に生きる体験をジャスミンはするのである。バッドのおかげでアメリカで生きてゆくことができ、生活の安定を得たジャスミンではあったが、彼との結婚を受け入れなかったのは、ニューヨークで出会い、知らぬ間に愛情を抱いていたテイラーとのことがあった。そしてテイラーが養女のダフとともにジャスミンを迎えにやってくるという知らせを受け、ジャスミンは新たな旅立ちをする決意をするのである。移民からアメリカ人へと変わってゆく過程に横たわるアメリカ社会に存在する問題や移民としてそれを乗り越えて行こうとする過程が、どこか心の奥底に闇を抱えているかに思われる作風をもつMukherjee ~~Mukhrejee~~としては明るいトーンで描かれている作品である。

９月例会　２０１２年９月２２日　キャンパスプラザ京都

Haiku: This Other World における“自然”のイメージ
――抗議小説とのつながり――

柳樂　有里

近年リチャード・ライトの再評価が行われつつある中で、特に注目されているのは、彼が晩年に没頭した俳句である。本発表では、1998年に出版された俳句集『This Other World』を取り上げ、抗議小説家として脚光を浴びたライトが「抗議の精神」を持ち続けていたのかどうかという疑問から出発し、彼が俳句というジャンルをどう受け止めていたのかを、自然描写に注目しながら議論した。ライトは、俳句という東洋の斬新な形式を採用することで、人間と自然における西洋的二項対立批判に対し、新しい視点を投げかけようと試みたと考えられ、また、そのようなライトが創作した俳句には、アメリカ在住時と変わらない「抗議の精神」を垣間見ることがでる。最初に俳句というジャンルをライトがどうとらえていたかについて、次に、俳句に使用される色彩と主観性に注目し論じた。

アメリカ黒人にとって、自然とはいったい何を意味していたのだろうか。西洋的思想において、黒人＝自然、野蛮、劣等、後退といった概念と関連づけられてきたことから、黒人作家たちにとって、自然美を扱うことに、こういったネガティブなイメージが連想されるという懸念が付きまとっていた。そんな中、リチャード・ライトは勇敢にも自然描写を取り入れた作家である。

ライトの作品には、黒人にとっての自然を、白人と重ね合わせる場合がある。自然の脅威を、黒人が対峙する白人社会と同一化している視点である。例えば、Native Sonの主人公ビガーは、洪水を白人社会に例えており、白人は人間というよりはまさに自然の脅威なのだと感じる。また、ビガーは白人社会に対面することは、まるで山、洪水、海と直面しているようだとも述べている。

ライトの俳句に色彩、とりわけ黒色、白色、黄色が頻繁に用いられていることは批評家も指摘している通りである。白は白人、黒は黒人、黄はアジア人の表象と見ることは、一見単純すぎる解釈であるかも知れないが、黄色が用いられた俳句を考察すると、ライトがアジア人、特に日本人に対して持っていたであろうイメージを投入したと考えることができる。また、白と黒が用いられると、人種問題が連想されることは想像に難くない。実際、白と黒のコントラストでは、人種問題を背景にしていると考えられる俳句が多く存在する。

最後に、ライトの俳句の形式について検証した。ライトが書いた俳句は5-7-5の音節を採用しており、日本の伝統的俳句の形式を尊重したと考えられているが、主観性という点においては日本の俳句を完全に模倣したとは言い切れない。自然諷詠が俳句集の殆どを占め、情景を立体的に描いている一方で、日本の俳句では避けられるはずの「I」を使って強い主観性を主張することがあり、また、order・ give・ grantといった遂行動詞を用いることで、その主観性をさらに強めている句がいくつか存在する。それは自然を支配しようとする人間の願望と受け止めることができる。

俳句は、人間と自然が調和し一体化する中での感動を詠むものである。しかしながら、ライトの俳句には、Native Sonにあるように、自然を、白人社会と同一化し、人間が対峙する存在として歌っていると考えられる句が存在する。このように、ライトがアメリカを脱出し抗議小説家から脱却しながらも、「抗議の精神」を残していたとことは注目に値する。

報告

2012年4月22日（日）、第29回日本アメリカ文学会中部支部大会、（於　愛知淑徳大学）
シンポジュームにて　「ハーレム・ルネッサンスのアフリカ系アメリカ女性作家再考」という論題で
下記の会員の方々が発表された。鵜殿えりか（ラーセン）、風呂本惇子（フォーセット）、森あおい（ハーストン）、戸田由紀子（ウエスト）

会員からの投稿

震災――その後

清水　菜穂

東日本大震災から1年4か月以上が経ちました。この間、メディアにより様々な情報が全国に向けて発信され、いまさら個人的な経験をお話ししても、何ら目新しいものではないでしょう。しかし、被災地の大学で週1回授業をしている中で私が感じていることなどを、日々多くの若者たちと過ごしていらっしゃる「黒人研究の会」の会員の方々にお伝えすることは、まったく意味がないことでもないかなと思い、筆をとることにいたしました。

2011年3月11日午後2時46分、私は自宅でひとりパソコンに向かっていました。仙台で暮らしていると、小さな地震は日常茶飯事で、このときもいつものように、揺れを感じてすぐに暖房とパソコンを消しました。ところが揺れはおさまるどころか、ますます激しくなり、家

全体が大きく左右に揺さぶられ始めました。そのとき、数年前の中越地震の際に、皿やコップが食器棚から落ちて壊れる音のすごさに震えあがったという新潟の従姉の言葉が頭に浮かび、あわてて台所の食器棚の扉を抑えました。リビング・ルームでは大型テレビがガタガタと動きだし、テレビ台から落ちるのではと思われましたが、思い出の詰まった数々の食器のほうが自分には大切だからと、あえて食器棚から離れませんでした。この間、わずか数分ほどの間だったと後から知りましたが、そのときはとても長い時間揺れているように感じていました。

インフラがすべて止まり、遠くに住む友人や知人のほとんど誰とも連絡の取れない日々が続きましたが、１週間後に電気が復旧し、携帯電話やインターネットが通じると、全国各地の方々から安否確認や励ましのお言葉を頂戴しました。「黒人研究の会」の皆様からも心温まるメールやお電話をいただき、どれほど勇気づけられたことか。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

仙台市の山沿いの住宅地に位置するわが家は、粗末な平屋の一戸建てですが、地盤の固さや揺れの方向などの点で運がよかったのか、被害らしい被害もなく、家人も無事でした。しかし、地震当初は情報も入らず、また自分の事で精いっぱいで、正直言って津波の犠牲になられた方々に思いを寄せる余裕はありませんでした。生活がようやく落ち着いた5月上旬、初めて沿岸部に行き、津波による無残な姿を目の当たりにした時には、全く言葉を失いました。若い頃ヨットの練習をしたあの穏やかな浜辺は、人の姿どころか、建物もすべて土台しか残っていませんでした。かつて家々が建っていたはずの海岸近くの土地は瓦礫でおおわれていましたが、そこに泥まみれの日の丸の旗が一本、風に揺られて立っているのを見たとき、誰がどのような思いでこの旗をたてたのだろうかと、思わず胸が詰まりました。

そんなとき、津波による犠牲者が最も多い地域にある大学から、新学期を6月から始めるにあたり、英語の非常勤講師がひとり足りないので出講できないか、という連絡が入りました。こんな私でもお役に立つならと、詳しいことも聞かずに引き受けましたが、実際授業が始まってみると、そう簡単なことではありませんでした。まず、大学まで通うこと自体が大変でした。津波でJR線の一部が流されてしまい、高速バスを利用することになったのですが、高速道路自体の修復工事と復旧支援のための車両による渋滞のせいで、自宅から片道4時間近くかかることもしばしば。大きな被害を免れた大学の体育館は避難所となっていて、グラウンドにはボランティアの方々の寝泊まりするテントがたくさん設置されていました。大学の隣接地には広大な瓦礫の集積所があり、そこで発生したハエが教室にも入ってきました。また仮設住宅が次々に建てられ、復旧の応援に全国から駆けつけた自衛隊の野営地もありました。授業が終わっての帰り道、バスから見える仮設住宅の窓の明かりに、そこに暮らさざる得ない人々の過酷な状況を思わずにはいられませんでした。

しかし、何といっても、最も心打たれたのは、学生の皆さんの姿でした。地元出身、あるいは近隣地域出身者が多いこの大学では、ほとんどの学生が被災しているのは明らかです。大学側からは学費免除や通学用の特別支援バスなどの多大な援助があるものの、どれだけの数の学生が学業を断念しなくてはならないだろうと心配しました。が、その数は非常に少ないとのことでした。交通事情が極端に悪い中、出席するだけでも一苦労のはずですが、遅刻や欠席が少ないのには驚きました。

ただ気になったのは、授業を始めて1か月ほどたった頃からどのクラスでも、休憩時間に授業と関係のない話をしにわざわざやってくる学生が、それも決まってひとりきりでこちらに近づいてくる学生が、他の大学よりもはるかに多いことでした。たとえば・・・

＃１　突然「先生はどんな本を読んでるんですか？」とA君。「小説が多いわね。あなたは本を読むのが好きなの？」と尋ねる私に、「いや、俺、本は全然興味ないです」と言う彼。（じゃあ、何でそんなことを聞きに来るのだろう？）

＃２　他の学生が皆教室を出て行ったのを見計らって、女子学生のBさんが近寄ってくる。「先生、これ、私が作ったスウィーツ。食べる？おいしいよ。」とアルミホイルの包みをつっけんどんに差し出してくる。「ありがとう。甘いもの大好きなのよ、私。」すると彼女は「また、欲しかったら作ってあげるよ」と、こちらの顔も見ずにさっと教室を出て行く。

＃３　「先生、午前中、数学の試験があったんだけど、先生にこの問題解ける？」と、笑顔のC君が問題を見せてくれる。「うーん、多分これ、連立方程式で解くのかな。難しそうね」と私。「そうなんだ、でも僕、全部できたよ。１００点！」と彼。（私は英語の教師であって、数学じゃないんだけど・・・）

このようなたわいのない話をする学生がやたら多いのは、地震のせいで人恋しくなっているからか、などと考えるのは、深読みのしすぎで、それこそ地震に過剰に私が反応しているだけなのかもしれません。最近、一般的に精神年齢の幼い若者が増えたというのは周知のとおりですし、たまたまそういう学生の多いクラスに当たっただけだとも思いました。しかし、他の非常勤講師仲間にそれとなく聞いてみると、実際、同じような経験をし、同じように感じている人も数人いました。

この大学では、学生も教職員も、ほとんどと言っていいほど誰も自らは地震の話はしません。肉親を亡くしたり、家を流された人たちにとって、口に出すことさえ耐えられないほどの苦しみなのだろうと、こちらもあえて話題にすることは避けました。そんな状況の中で忘

れられないのは、取りとめのない話をしているうちに突然地震の時のことを話し出したD君のことです。当時祖父母と三人で自宅にいた彼は、「尋常でない揺れにパニック状態になって、わけがわからなくなってしまった」と顔を赤らめながら話しました。それでも彼は、祖父母の手を引き、外に出て避難し、後にした家は半壊だったそうです。「こんな年齢になったのに、パニックに陥った自分が恥ずかしい」と言う彼の目から突然大粒の涙がぽろぽろこぼれ落ちるのを見て、私はどう対応したらよいかわからず、ただ「そうだったの。辛かったね。それでもおじいちゃんとおばあちゃんを連れ出すことができたんだね。ほんとに大変だったね」としか言えませんでした。

D君のような学生たちにどのような対応をすべきか、教員同士で話し合うことも何度かありましたが、それぞれ事情も違い、一概にどうすべきなどという方法はないのだろうと思われます。ただ、D君に関して言えば、辛い経験を言葉で表現できたことは、彼がある意味でその経験を乗り越えるための一歩を踏み出したことを意味しているのかもしれません。週1回の授業でしか顔を合わせない英語教師は、近すぎず、遠すぎず、うってつけの距離にある話し相手だったのでしょうか。

あの地震から1年たった今年4月、この大学でも、例年よりかなり少ないとはいえ新入生を迎えることができました。授業はそれなりに順調に進んでいます。昨年のように休憩時間に話に来る学生は減りました。でも彼等の本当の心の中は私にはわかりません。阪神淡路大震災が起きた時、私は遠く仙台から、物理的な被害の大きさはもちろんのこと、人々の心の傷の深さに思いを馳せたものです。でも、今思えば、私は表面的にしか被災という事実を理解していませんでした。当事者でなければ、あるいは被災地という空間に身を置かなければ、理解したり感じ取ったりすることのできないことがたくさんあるのだという、実に当たり前のことを、今さらながらひしひしと感じています。災害の前にはあまりに無力なわが身ですが、いつの日か若者たちの傷が癒えるようにと、心から願っております。

東日本大震災を振り返って

星　かおり

東日本大震災から早1年4カ月。「被災地に住んでいるということで、震災をテーマに、投稿をお願いしたい」と連絡をいただいたが、「被災者」と言うには申し訳ないくらい、被害は微少なものだった。私自身に降りかかった「被害」と言えば、自宅が一部損壊、家具、特

に本棚が幾つか壊れ、その下敷きになったパソコンが破損し、書きあげたばかりの論文の原稿のデータが消えて涙した程度だ。

このような訳で、東日本大震災について、ドラマティックな話や、教訓になる話はできない。震災時の個人的な体験と今の仙台の状況についてお話しさせていただくことにする。

2011年3月11日2時26分、地震が起きた時、私は仙台駅に隣接しているデパートの3階、本屋のエリアにいた。一瞬眩暈を起こしたのかと思ったが、すぐに大きな地震だと分かった。本棚が大きく揺れ、本が次々と勢いよく目の前に飛んできた。本が真っ直ぐ空中を飛ぶのを初めて見た。急いで本棚の間から通路に出て、持っていたバックを頭にのせ、床に座り込んだ。とてもではないが、立っていられないほどの激しい揺れだった。あちらこちらから悲鳴が上がり、商品は棚から床に落ちた。天井のパネルがみしみしと音を立て、パラパラと細かい何かが落ちてきた。その時、２月に起きたNZ地震で倒壊したビルのことを思い出し、「ああ、このままこの建物も倒壊するのかな。」とぼんやり思っていた。

揺れが収まった後、店員の方々の誘導で、仙台駅1階入り口まで移動した。仙台駅のペデストリアンデッキに出ると、携帯のカメラ機能で周囲の様子を夢中になって撮っている人がたくさんいた。その様子を見て、大きな揺れがあったが、怪我人もなく、まあ大したことはないのだろうと思っていた。ただ、地震の影響で交通機関が止まってしまっては帰宅できない。市営バスはまだ運行停止の指示が出ていなかったらしく、次々とバスプールから走り出していく。私は自宅周辺を通るバスに乗り込んだ。

バスの中から見た街の中は、異様だった。建物の照明や信号はすべて消え、電線が切れて垂れ下がり、建物の外壁に大きく亀裂が入っていた。外壁のタイルがあらかた落ちてしまった建物の多かった。路面は所々隆起しているところ、亀裂が入っているところがあった。バスの中で乗り合わせたお婆さんは、しきりに身じろぎしながら、自宅が倒壊していないかと不安を訴えていた。そうこうするうちに、バスに無線で運行中止の連絡が入り、乗客は途中で降ろされることになった。タイミング悪く、急に雪が降り出しだし、足元に降り積もる。その場所から自宅まで、５～６キロはあり、しかも坂道が続く。困っていたところ、私の自宅の近くまでタクシーで帰ろうとしている人を見かけ、体を張って走りかけていたそのタクシーを止め、強引に相乗りさせてもらった。

自宅に戻ると、家の基礎が大きく欠け、外壁に大きな亀裂が入っていたが、倒壊は免れた。自宅にいた両親も幸い怪我もなく、割れた食器類を片付けていた。私は自室に入ろうとして驚いた。天井までの本棚が6本倒れ、部屋の入り口を塞いでいた。本を踏みつけるのは忍びないが、仕方がない。相変らず余震が続く中、部屋の片づけを始めた。

日が落ち、夜になった。カップラーメンで夕食を済ませ、外に出て空を見た。宮城県全域で停電になっているため、夜空に今まで見たことがないくらい星が鮮やかに瞬いている。傍らに置いたラジオからは、流れるたちの悪い冗談のような情報が流れだしていた。「仙台市若林区の××地区では200名以上の溺死者が…。」その地区は確かに海岸に近いが、いくら津波が来ても、そんなに内陸まで来るはずがない。「〇〇地区では1000人以上が建物の屋上に取り残されて…。」「××地区の死者は500名以上と推定され…。」ラジオから流れる、たちの悪い冗談はだんだんひどくなる。

たちの悪い冗談は、厳しい現実だった。停電が続き、情報源は携帯用のラジオ一つ。映像を伴わない情報は、現実味がなかった。震災から2日後、届けられた新聞に目を通し絶句した。町ごと壊滅した宮城県南三陸町、岩手県陸前高田市の写真。仙台市ガスの施設が全壊している写真。目から入ってきた情報は、強烈に現実を突きつけてきた。

震災から4日後、電気が復旧。これで、友人、知人、親戚に連絡が取ることができた。早速メールや電話で連絡を取った。「生きてた？」という台詞が挨拶になるなど今まで思いもしなかった。

そんな中、ストレスと疲労が重なったのか、突発性難聴が再発。とある病院に緊急入院した。だが、病院の備品も薬の在庫も十分でない。暖房もほとんど利かず、毛布も足りない。毛布一枚の上にダウンコートを羽織り、体を丸めて一日を過ごす。震度3～4レベルの余震がひっきりなしに起こるので、注射や点滴も地震の合間を見計らって打つ状態だ。あまりに揺れが続くので、眩暈が止まらない。突発性難聴に「地震酔い」の診断が追加され、乗り物酔いの薬をかじりながら、ベッドに横たわっていた。食事は1日3回出たが、一食分がかまぼこ1枚にカロリーメイト1箱、あるいは小さなパン一個というメニューで、500ミリペットボトルの水が一日1本配られた。

本来２週間程度の入院加療が必要なのだが、ベッドの空きがないということで３日で退院し、自宅療養することになった。退院後、水と食料の確保が毎日の日課となった。我が家が属する町内会からは、食料配布や給水所の連絡は来ない。仕方がないので、リュックサックを背負い、ポリタンク片手に自宅周辺をうろつき、偶然出会った人や近所の人からの口コミ情報で、水が入手できる場所や、食料を扱っている店の情報を得て、水や食料を入手した。口コミのありがたさをこの時ほど実感したことはない。調理は昔懐かし、七輪と練炭を使った。卓上ガスコンロも石油ストーブも店頭から姿を消し、石油もガソリンもなかなか手に入らなかった。宮城は３月末でも雪が降るくらい寒い。七輪は、暖房の役割をするので一石二鳥。でも換気には注意をした。このような日々を過ごすこと

約2週間、3月下旬に水道から水が出た時には、家族全員、水道の蛇口の前で小躍りして、そして何故か蛇口を拝んでいた。

ライフラインの復旧は、心を明るくした。ようやくスーパーに生鮮食品が入荷し始め、通常の食事が作れるようになってきた。郵便物も少しずつ届くようになった。そういった「当たり前」だったことが少しずつできるようになっていくのが嬉しかった。震災から約3週間経った頃、4月に入った頃だった。

4月上旬、ようやくガスが復旧し、料理も入浴も自由にできるようになった。ガスの開栓作業に来てくれた関西地方の作業員の方が「お疲れ様でした。ゆっくりお風呂に入ってくださいね。」と声をかけてくれた。ここでも家族全員、その作業員の方々を拝んで笑われてしまった。その晩、1か月ぶりのお風呂を心ゆくまで堪能したのは言うまでもない。

その後、5月からは非常勤先の大学が開講し出勤し始めたが、そこからはどこかぼんやりとしたまま、一年間が過ぎてしまった。いつもと変わらす淡々と授業をする毎日だったが、忌引きのための欠席届は例年より多かった。「ようやく葬式ができたんです。」と言いながら欠席届を提出した学生には、かける言葉が見つからなかった。

現在、仙台市の中心部では震災の傷跡はほとんど見当たらない。交通機関もほぼ復旧してあまり不便は感じない。しかし、仙台市郊外には仮設住宅があり、沿岸沿いは塩害で枯れた草や土で茶色くなった景色が一面に広がる。仙台―石巻間の鉄道はまだ完全に復旧していない。石巻の某大学の近くには、以前よりは減ったが、がれきが山積みになっている。そして仮設住宅も近くにあるのだ。週一回だが、石巻に出勤するたび、そのがれきを見て胸が痛む。

先日、石巻のがれき受け入れにより精神的苦痛を受けたとして、北九州市の住民グループが北九州市と宮城県に訴訟を起こしたというニュースを聞き、復興にあたっての姿勢について考えさせられた。「復興とは、被災地の痛みを「分かち合う」こと」という言葉を、震災後メディアを通してよく耳にする。しかし、この言葉を実行するにあたってどれだけの覚悟と努力が必要になるのか。私自身を含め、被災地に生活する人も、そうでない人も、震災からの復興に関わる以上、痛みを分かち合う覚悟を問われているのではないだろうか。

故山田裕康先生　神戸市外国語大学学術情報センター（図書館）
寄贈資料リスト（追加分）

第72号に記載されました寄贈資料リストの第二弾です。図書館側の整理の都合により、順次お届けします。ブルースに関する貴重な資料ですので、研究にお役立て下さい。

図書

書名　巻号　版

1　*The Big Book of Blues: A Biographical Encyclopedia* [以下、同様に各単語の最初の文字を大文字にしイタリック体にする]　: pbk.
2　Yonder come the blues: The evolution of a genre　: pbk.
3　Early downhouse blues: A musical and cultural analysis　: pbk.
4　Blues of the record: Thirty years of blues commentary　: pbk.　reprint
5　The Guinness who's who of blues　: pbk.　2nd.ed
6　Good morning blues: The autobiography of Count Basie　: pbk.
7　King of the delta blues: The life and music of Charlie Patton　: pbk.
8　All music guide to the blues: the experts' guide to the best blues recordings　: pbk.
9　Encyclopedia of the blues　: pbk.
10　Damn right I've got the blues: Buddy Guy and the blues roots of rock-and-roll　: pbk.
11　Nothing but the blues: The music and the musicians　1st ed
12　Black and blues: The life and lyrics of Andy Razaf
13　Beale Black & blues: Life and music on black american's main street
14　Deep blues　reprint
15　The death of rhythm & blues　1st ed

計　15冊

（神戸市外大図書館のリスト通り掲載）

入　会　者

星埜　美智子（ほしの　みちこ）氏
自己紹介：①大学時代に南アフリカの文学に出会いました。というか、そもそもは野間寛二郎の『差別と叛逆の原点』という題に惹かれて南アフリカのアパルトヘイトの制度を知り、南アフリカを中から知るために物語を読むことから始まりました。Ravan Pressから出版されている Staffrider Series の短編集を折に触れて読むことで今に至っています。ナイジェリア出身のBuchi Emecetaやドリス・レッシングも好きです。アパルトヘイト下の文学を今読み続ける意味を考えています。周辺にこの分野で話のできる人がいないので、会に入会させていただくことで刺激を受けたいと思っています。よろしくお願いします。

神本　秀爾（かみもと　しゅうじ）氏
所属：京都大学（院）人間・環境学研究科　共生文明学専攻
自己紹介：現在、京都大学大学院で文化人類学を専攻しております。アフリカン・ディアスポラのあいだで創造されたアフリカ性・黒人性に関心があり、2005年以来、ジャマイカのラスタファーライ(Rastafari)を主な研究対象として、グローバリゼーション下における動態と変容について検討を続けてまいりました。今後は、ラスタファーライのハイブリッド化（信徒の多国籍化・多人種化）やファッション化・「国民文化」化といった状況に着目し、現代世界におけるアフリカ的・黒人的なものの位相について検討を続けていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

柳樂　有里（なぎら　ゆり）氏
所属：京都大学（院）人間・環境学研究科　共生人間学専攻
自己紹介：京都大学大学院でアメリカ文学を専攻しており、特に黒人女性文学を中心に研究しております。1960年代の黒人芸術運動とともに台頭した黒人女性作家たちの作品のおけるアイデンティティの確立に興味があります。白人社会の中で強要されてきた価値観を、作品にどう反映させ、またそれを黒人女性作家としていかに乗り越えていくのかについて、ブラック・フェミニズムに注目して考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

山本　直子（やまもと　なおこ）　氏
所属：龍谷大学　経済学部
自己紹介：イギリス小説とインド英語小説を中心に英語圏の文学を研究しております。これまで、ヴァージニア・ウルフ、ラドヤード・キプリング、その他様々な作家の小説研究に取り組んで参りました。ここ数年は主に19世紀と20世紀のイギリス小説における東洋と西洋の邂逅というテーマに焦点を当てて研究してきました。最近はキャリル・フィリップスの作品に関心があり、黒人研究の会で色々と勉強させて頂ければと考えております。ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

平塚　博子（ひらつか　ひろこ）　氏
所属：日本大学　生産工学部
自己紹介：日本大学生産工学部に所属しております平塚博子と申します。これまで、ウイリアム・フォークナーなどアメリカ南部文学を中心に研究を進めてまいりました。黒人文学研究についてはまだまだこれからですが、皆様から色々とご指導を賜れれば幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

深瀬　有希子（ふかせ　ゆきこ）　氏
所属：東京理科大学　理工学部
自己紹介：はじめまして。Toni Morrison Society（米国）で本学会会員の先生方とお目にかかりましたのを機会に、入会させていただくことになりました。初めてモリスンほか、黒人文学を読んだときの衝撃を忘れずに、今後も研究をつづけていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（入会時順）

訃報

古川博巳　氏
元天理大学元教授。黒人研究の会創立メンバー、元代表として長年ご貢献いただきました。病の為2012年9月15日逝去。85歳。

編集後記

東日本大震災から一年半が経ちました。震災や津波で一瞬のうちにこれまでの生活を奪われ、今なお元の生活に戻れない方々のことを思いますとき、心痛みます。黒人研究の会にも被災地域にお住まいの会員がおられ、震災当時の状況を少しでも共有したいと考え、清水菜穂氏、星かおり氏に当時のことを書いていただくようお願いしました。「体験したことでよければ」と投稿を受けてくださいました。感謝です。

会報第74号を準備している頃、「古川先生ご逝去の知らせ」が入り、びっくりいたしました。いつだったか「ピース・ボートで地球一周の旅をしてきました」とうれしそうにお話くださったあの時の笑顔が忘れられません。寂しいかぎりですが、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

会報発行月が変更されましたのでお知らせ致します。これまでは、6月、12月を発行月といたしておりましたが、3月会誌発送時に会報も同封していただけるよう、9月、3月といたしました。よろしくお願い申し上げます。

会計からのお願い

2012年度会費6千円の未納の方は下記郵便振替まで至急お振込み下さい。
振替番号: 00910-6-148435
名義人: 黒人研究の会

＜編集＞ 黒人研究の会・編集部
〒603−8577 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞ 井上 怜美